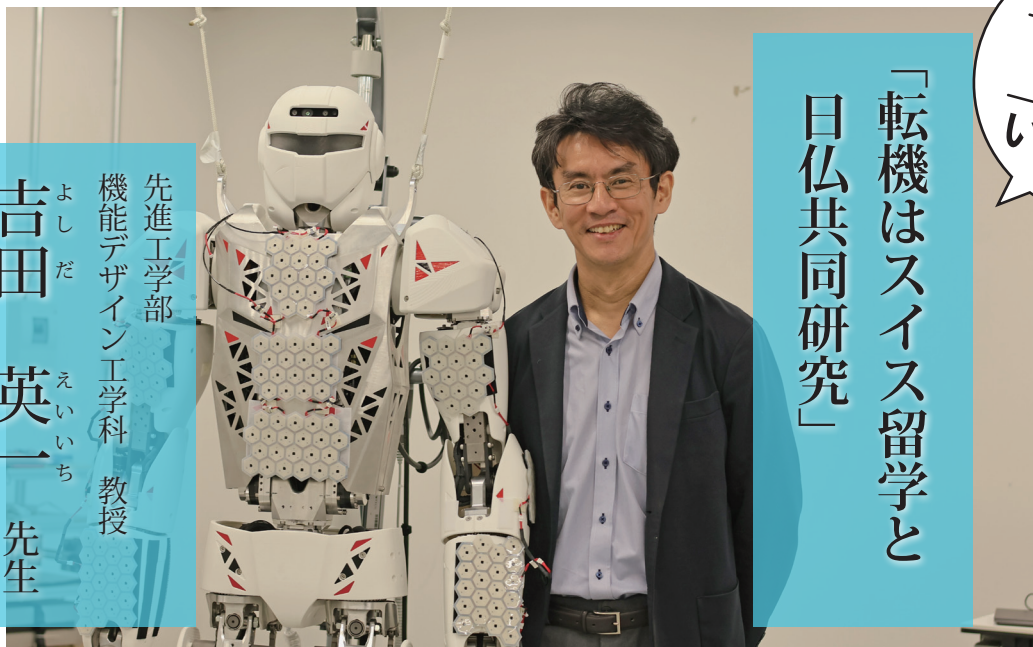


こんな先生
いるよ!

「転機はスイス留学と 日仏共同研究」

先進工学部
機能デザイン工学科 教授
よしだ えいいち
吉田 英一 先生



ヒューマノイドロボットの動きを創る

どのような研究をされていますか。

インタラクティブ・ロボティクスがテーマです。人間に形が近いヒューマノイドロボットを題材として「人間を知り、ロボットを賢く」を基本方針に、人やその環境とスムーズにインタラクション（情報・モノのやりとりや協調）するロボットとその知能を創り出す研究をしています。

ロボットの運動能力はここ数年飛躍的に向上していますが、多くの接触を伴う柔軟な動作はまだ苦手とします。それを克服するため、まずは人間の動きを分析し、その仕組みに仮説を立ててヒューマノイドで確かめます。多くの接触を含む複雑な行動をロボットが自動で生成できるようにすれば、人間工学に基づいた製品設計や評価、人間の意図を推定して人間を快適にサポートするロボット、人間と自然かつ安全に共存できるロボットの開発などに活用できます。

ドラえものの「道具」に興味

ロボット研究に進んだきっかけは。

小学生の頃、『ドラえもん』が好きで、登場する道具の機能をまとめた「道具ノート」を作っていました。工作が好きだったこともあり、私が興味を持ったのはロボットであるドラえもんそのものというよりは、ドラえもんの道具でした。機能をいかに実社会に役立てていくかを考え始めた原点だと思います。

恩師との出会いとそこで学んだこと

以前日仏共同研究へ参加したそうですね。

前職の研究所で、2004年から5年間フランスに滞在しました。当時は分散型ロボットの研究者でしたが、思い切ってヒューマノイドの自律性向上の日仏共同研究に飛び込んだのです。その際、ラボの共同ディレクターとしてお世話になったのが故ジャンポール・ロモン博士です。博士はその時すでに世界的に有名なロボット動作計画研究の第一人者だったにもかかわらず、私と同じく新たな研究分野への挑戦を断然して快く参加してください、ロボット導入やラボの立ち上げ、運営を共に行いました。博士は、一見関係が薄い理論や研究にも興味を持ち、本質を見抜きそれらを結び付けて新たな研究成果を生み出すことが得意な方で、何事も好奇心を持ってチャレンジすることの意義を学びました。

この研究に誘われた理由の一つは、大学院時代にスイスへ留学しフランス語を習得していたことです。フランス語は今も留学生や研究員との交流に役立っています。最近ハマっているのはオーディオブックの『源氏物語』です。通勤時に聞いていますが、和歌吟詠や雅楽、読経なども入り、平安時代の世界観が楽しめます。人の弱さや欲深さなど現代にも通じる人間社会の縮図が見事に描かれ、これが千年も前に書かれたものかと思うと感動します。間違いない世界に誇れる作品だと思います。

藤沢享乃（ジェイクリエイト）

【写真左】 敬愛する、故ジャンポール・ロモン博士と
【写真中】 日仏共同研究での貢献により、2016年にフランスの国家功労勲章「シュヴァリエ」を受章
【写真右】 研究室の学生や各国からの留学生たちとこ焼きパーティー

